

3. 解説：実証と導入

わが国において、新しい社会的な仕組みを導入する場合、ほぼすべてに「実証」プロセスが設定される。類似概念もいろいろあるが、最近は、「PoC」が“はやり”である。

- PoC (Proof of Concept 概念実証)：新しい製品やサービスに用いる概念、アイデアや技術などが実現可能かどうか検証するためのもので、一般的には試作品開発に入る前に実施します。
- PoV (Proof of Value 価値実証)：実現可能性が高いことがわかっているものの、その製品やサービスがユーザーにとってどれほどの価値があるのか検証
- PoB (Proof of Business)：費用対効果、損益分岐点など収益性やコスト構造面などを試算し、その製品やサービスがビジネスとして継続可能かどうかを検証
- 実証実験：細かな部分まで作り込んだ製品やサービスをリアルな環境で実際に運用し、実用化に向けて課題を洗い出す工程
- プロトタイプ(Prototype)：技術やアイデアの実現性・方向性をかたちにした試作品のことで、プロトタイプを用いて改善を繰り返し、完成品に近づけていくための工程をプロトタイピングと呼ぶ
- MVP (Minimum Viable Product 実用最小限の製品)：実用に耐える最小限の機能を持つ製品やサービスを製作し、それを用いてユーザーや市場の反応をテストし、改善を繰り返す

出典：PoC(概念実証)とは？メリットやデメリット、成功のポイントを解説 Sony Acceleration Platform2024.08.30 <https://sony-startup-acceleration-program.com/article1241.html>

いずれも、所詮「実証」であり、新たな社会的仕組み/サービスの導入・市場化には至らない。例えば、ITS(Intelligent Transport Systems)関係において、ETCの導入以降、未だ「実証」が続いている。「日本版ライドシェア」「日本版 MaaS (Mobility as a Service)」「完全自動運転(レベル4)」等、本格導入までの道はまだ遠い。失敗が許されない、責任を避けたい「意思決定システム」やリスクに関する科学的合理的な「社会的合意システム」の問題があり、スピードが上がらない。

加えて、未だに PDCA という環境コントロール可能な予定調和的なマネジメントに固執している。環境変化にスピーディに対応する OODA ループとアジャイル的対応に組織マネジメント、プロジェクトマネジメントを移行しない限り、「導入」に至らない「実証」を延々と繰り返すことになる。

野口聡一氏は2022年7月に開催された宇宙ビジネスカンファレンス「SPACETIDE 2022」で「もし失敗があったときに(JAXA や NASA などでは) 報告書を上司に提出するが、SpaceX はその間に改良試験が終わって、次のロケットを打ち上げているくらいのスピード感がある」。事実、日本の H3 ロケットは、打ち上げ失敗から次の打ち上げ成功まで1年弱を費やしている。その背景には「変革が速いアジャイルな組織」「考え方がフレキシブル」「ドラスティックな変化をいとわない」という風土の違いがある。イーロン・マスクという希代のイノベーターの存在も大きい。

出典：ロケットを箸でキャッチした SpaceX の凄さの源泉―「他が報告書を書いている間に次を打ち上げる」と野口聡一氏 2024年10月15日 CNET JAPAN <https://japan.cnet.com/article/35224915/>

参考：H3 ロケット 失敗からの再起 技術者たちの348日 初回放送日：2024年4月20日 NHK <https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/episode/te/4QZQJ5LWZQ/>